

雪嶺集

〈宮坂静生鑑〉



枯野

小林貴子

福梅や昼は山塊遠ざかり
日月を肚に入れたり枯野行
あらたまの礁をすべり落つる潮
襖絵に海潮音の自づから
襖絵の海を孤絶と思ひけり
骨壺を覆ふ金欄初寢覚
厄介な袋小路へ餅配り
はいはいと話半分餅を焼く
黒豆を煮て行く年に左様なら
人類の滅びを語り春の猫